

大久保村適産調旧蹟考

石川理紀之助著

大久保村適産調旧蹟考目録

地勢岩石土壤		1	くみの木の御札山		5
白洲野		1	千刈田の新天地		5
飛積層		2	小川		5
桃木台		2	小川中道苗代田の地質		6
天神場		2	殿道		6
桃木 竹原		2	長者屋敷		6
新関桃畑の本場		2	大久保の産土神		6
源四郎桃畑		2	吉祥坊		6
武八桃畑		2	乱橋		7
桃畑の盛衰		2	砂原村		7
要助桃畑		3	松館		7
藤崎		3	大久保		7
高津森		3	わく長根		7
青龍溜		3	天神社		7
古器の産地		3	今潟の土質		7
狐森の古人形、古銭		4	汲田 袋		8
新関		4	龍神社		8
新関旧家菅原甚兵エの旧屋敷		5	菅原源十郎翁の調		8

大久保村肝煎順序	8
大久保支郷のはじめ	9
旧家	9
桃樹のはじめ	10
秋田風土記抜書	10
古書付抜書	10
略図	11
殿道の図	13
元木の図	14
古宮 元卜村 松館	14
野村	14

大久保村適産調旧蹟考

地勢岩石土壤

本村耕地は東龍毛、岩瀬、南岩瀬、乱橋、西八丁目、下刈、天王、北は八郎湖を境とす。元より独立の村居なりといへども今小部七ヶ所にあり。則大久保、元木、新関、野村、天神堂前、大郷守、大郷守街道、大清水等也。

地勢

第四紀新層の古地及新地等なり。新層となる變動には金足沢、真ヶ田沢の水勢によりて変じたる也。北野畑地に於ける凹凸あれども風勢によりて皆變動をなせるなり。

岩石

金足、真ヶ田より成れるは石英粗面岩と頁岩等より成れるものなるべしと雖、新地と変じたるを以て混雜して一定ならず。南西北部の砂礫は海湖の砂にして其母岩知るに由なし。

土壤

西部北野は畑地多くして全部砂土なり、麦、瓜類、桃適せり。南東は腐植質多し、金足沢及真ヶ田沢の変動より出でたるものにして壤土処々にあり。北部湖岸は耕地古地及新地の腐植土又は埴土壤土多し。

白洲野

古地と新地也。近代押上げられたる地にあらず。新地は潟ばたに僅あり、古く湖のあせたる地にして上段より砂を吹飛びて重りたる地也。白洲野といふ名を以て考ても白砂の附寄洲なる事を知る。此地麦最も適せり。其種類

カルホルニヤ（赤色）

六角麦（有毛）

ライ麦（同上）

如斯種類最よろし。無毛ソノラの類適せず。山畑より麦する方也。塩気と肥多く入る為にや。

含鉄鉍あり赤砂鉄気の湿地あり半分余湿地也。蓮沼に水あれば湿気す、中通まで乾地其沖は湿地也。大崎の方三分の一位鉄気多し塊をなせり。湿気勝なる故大豆あしし。

*白洲野を開きたるは菅原源十郎翁の調にもある
吉田嘉右エ門といひし人也。

*無毛麦は乾地に適す。

*白洲野の上斜地は赤色の砂土に埴土交れる処あり古地也。

飛積層

字長根尻の凹凸の地は古地にして飛積の最も甚だしきあと也。処々小沼あり。

桃木台

字海老瀬沼の二田の新堤の下流の二田新堰境橋を経て男鹿道のつづき西方の小野山をいふ。或は其次の小山ともいふ。是は新関の旧家甚兵エの古く桃の木を植し処といふ。

天神場

細谷近く則二田村の上はづれの街道の西方にあり菅原甚兵エの宅ありて氏神のあと天神場といふ。是則新関の天神の旧宮也。今の新関の萬六、善六の後に甚兵エの旧屋布あり、これに移りしと也。

新関桃畑の本場

ぶりこ沢を第一とす。地勢は西に松林あり東に長根あり。今は松林少し腐植質普通の砂土深し。松林のありて防風をなす処には桃樹よく適して結果する。防風林なき処は寒木に枯て不結果也。近年回復せり。古木伐残したるははへにして今結果最よし。

源四郎桃畑

菅原源八の分地也。老後上方参詣して良種を携ひ来りて取立しと也。□の頃の人也。感謝状に委し。

武八桃畑

野村の後にあり。武八といふ人の畑にて埴養よく結果見事なりしより旧藩主の御休みなどになりし処なり。年々虫を駆るに雨ふれば木をふりおとして駆取ること怠らずといふ。此畑の南西の長根に防風松林ありしとなり。

桃畑の盛衰

古きことは詳ならずといへども、四五十年前の

頃（嘉永安政の前後）盛にして其收穫一家にして純益百円の者多し（米三斗入一円の頃）。然るを明治十五六年の頃に至り次第に枯木多くなりて衰微に至れり。されども防風の松林のありし地は可也に存せり。林を伐採したるはことごとく枯死せり。其後手入する人もなく打絶しを廿三年の頃復旧せんとて有志相謀り、予も折々実地に至りて手入等の事を斗りしに次第に引直り、新に植付の分も四五年にして結果せり。殊に古木にして不伐分は結果よろし。矢張防風林のある処は良結果をみる也。

＊将来透伐の約など必要なるべし。

要助桃畑

現今盛也。菅原要（養）助氏農業の熱心家にして驅虫其他防風培養に心を尽す故に良結果を得る也。其外巴旦杏の上等あり。武八より接穂求めて接たりといふ台木は桃木也。此畑は字出水の上にして松林あり地東ひらきたり普通腐植質砂土也。
＊台木の事可承。

藤崎

古書に藤崎といふ村あり今の野村の古名なり。野村に現今住居して居る人には旧家なしといへば、中絶して藤崎といひし村人の跡は絶たるならんか。

高津森

新関天津の南、藤曲の西にあり一段高き処なり。別に考へもなければ後学の人の参考に記す。

青龍溜

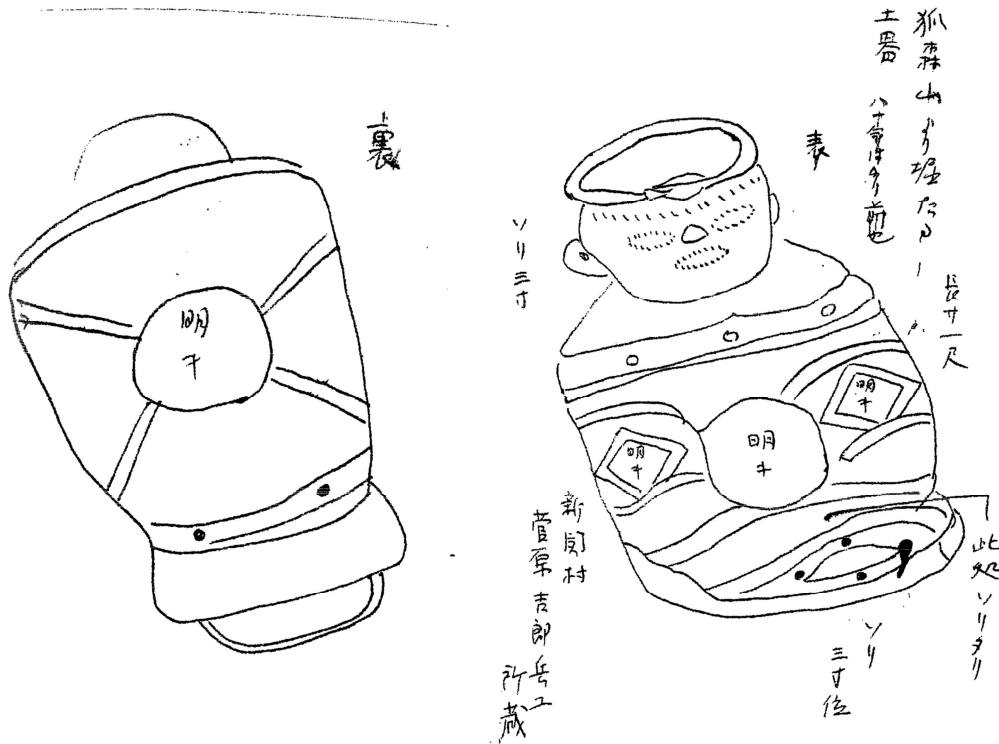
藤曲の南と男鹿街道より街道を横切て大郷守に行く堤縄手の北の間にある池をいふ。同上。

古器の産地

大郷守より藤曲に出る墓処及び藤曲の清水の（相染の小祠ある涌き水の良水ある処）ある新茶屋の間、又は天神社の後の辺等に矢の根石等其他の石器又は土器あり。元より新層の飛積層地なれば古層の地に住める人にあらず、故に朝鮮土器の欠けなども多く交れり。此辺は砂原村のあとなるべし。

狐森より出たる土器

狐森山より堀たる土器、八十年ばかり前也。
新関村菅原吉郎兵エ所蔵



薄く葉を掛たる土器也。朝鮮土器後のものにや。其形を古きにかたどりて製したるものと見ゆる也。此狐森は新関より後谷地を経て畑に行く山の入口にあり、此狐森の山の入口の南の田より十間斗り道脇より出たりといふ。

古銭

藤曲の清水の出つる処の街道の西の畑より出たるよし。

すべて此藤曲よりつゞき七ツ森（今避病室、筆塚等ある処）天神社の辺処々より古器の出るをみれば此辺はもとの砂原村のありし処にて、此砂原村は古くよりありし村なるべし。此清水のある処より田地を過ぎ乱橋に街道ありて、今の大久保村は馬踏村とて僅の小村にありしと也。天正後今の大久保は開けたるなるべし。

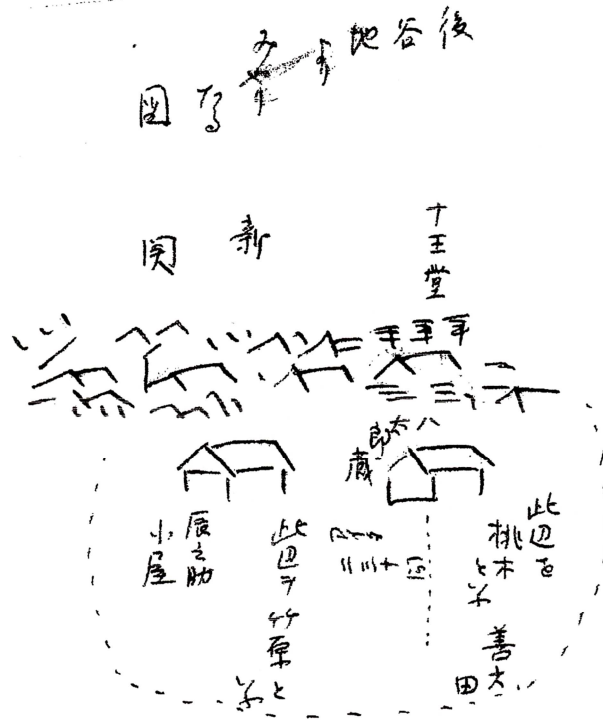
新関

これは古き村にあらず、例の甚兵衛開墾の為此に移りて開きしならん。新関の名も其開墾の堰の名にて、上ハ沼より新堰を堀たる今の馬洗場の堰より出し名ならんかし。

新関旧家菅原甚兵エの旧屋敷

後谷地よりみやりたる図

此……印の内は小字桃の木、竹原などと唱ひて、新関を開きたる菅原甚兵エの屋敷跡也。桃木、竹原のありし名残の名なるべし。

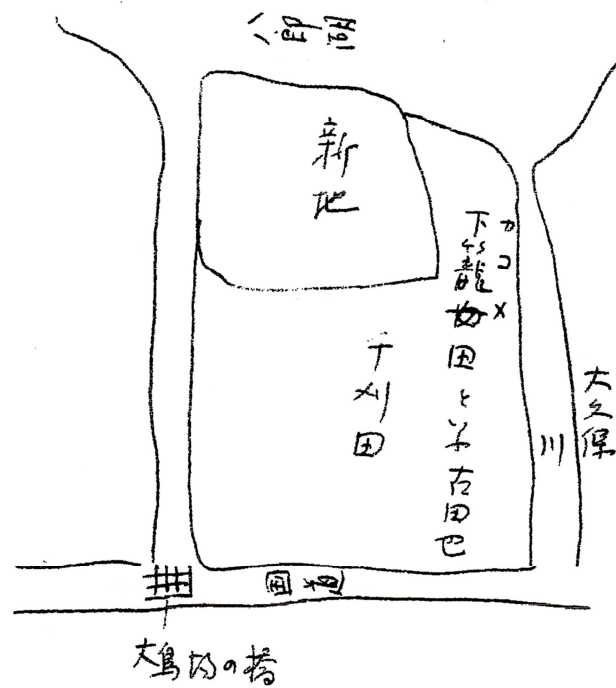


くみの木の御札山

大郷守より街道の小村に出る南西にある滔溜と国道の間にある松林也。

千刈田の新地

此新地とあるは近年の附寄洲にして、御一新前（三十年前）まで網を引たる地なりといふ。土地変動の参考の為に。



小川

大鳥羽の川をいふなるべし。此川上は頭無しウハヌマの堤より上沼に入、夫より流て国道を貫き今字千刈

田と小川中道の境を流れて八龍湖に入る也。此川を小川といひて上ハ沼の水の八龍湖に入たる古き川筋なるべし。今の小川中道の川と新関の間は古き浅瀬のながれるべし。粗砂あるを以て証とするに足る。寛文御帳に古川とあり。

小川中道苗代田の地質

此辺の苗代壤土多し。地最も浅し。苗代のあとに皆稲を植て收穫する也。

殿道

古国道を殿道といふ。藤曲より沖谷地沼の上をへて乱橋の白山神社弁財天宮の間に出て川を渡り（此川に近年まで橋柱ありしといふ）大久保の古宮にわたり（古宮には近年まで大木ありしと也）元木に出て長者屋敷を経て（道心谷地の上）龍毛道に出て下虻川へ入る也。これを殿道といふ。今の国道は其後に出来たるもの也。

*大久保の産土神はもと乱橋の産土神なりといふ。

長者屋敷

元木を経て下虻川の道心谷地の上に出る田道よ

り五枚目の田の中に小さき柳あり、長者屋敷の井戸あり、此辺元木までの屋敷なるべし。石土器等今にあり、此井戸今下虻川の地となれる、もと元木の地にて古野帳にあり。此長者屋敷より出る石土器は石器時代より住したるものにあらず、古代のものを長者が持用せしが残れる也。元木より北の方の一段高き変動の時洲崎也。

大久保の産土神

もと殿道より橋をわたす（乱橋の白山と弁天の間）。此地に至る近年まで古木ありしよし、元乱橋村の産土神なるよし、其後今の産土神の地に移す。今の産土神の地はもと山神社地なり（今も山神の小祠脇にあり）。故に産土神小路より鎌田善兵ヱ小路まで字山神といふ。又山神内、則今の産土神長処は高橋正の先代の宅地なりしといふ。高橋正ももと乱橋より引移りたりといふ。

吉祥坊

正保四年野帳に吉祥坊といふ屋敷あり、今の高橋正の宅地なり。吉祥坊といふ者の屋敷にうつりたるなるべし。吉祥坊とは権四郎の先代なりとい

ふ。

乱橋

隣村乱橋は弥陀の橋なるよし。大久保村境ちかき白山弁天等の社の東南に阿弥陀堂あり。此弥陀堂は殿道ちかくして川に橋ありしを弥陀の橋と古くいひしを村の名となれりしを、いひ訛りて乱橋と唱ひしといふ。此村より高橋家其他あまた大久保に移住せしより縁の深き村居也。

砂原村

新関の古名といへるはいかが。砂原村は北狐森辺よりかけて天神森、七ツ森、藤曲り辺にありし村なるべし。古銭の出たるも吉郎兵エが土器を堀りし辺も皆砂原村のうちなるべし。さるを新関に村居を移して住居せしものにて、土地は今の新関にあらざるべし。

松館

元木山二階の近き山にありて岩瀬の地形ちがたの内なるべし。古野帳等にも松館と字あり。

大久保

大窪なるべし。高田殿道等より一段窪みたる地なるを以て名付しなるべし。高田も大窪に対するの名也。

わく長根 元やしき

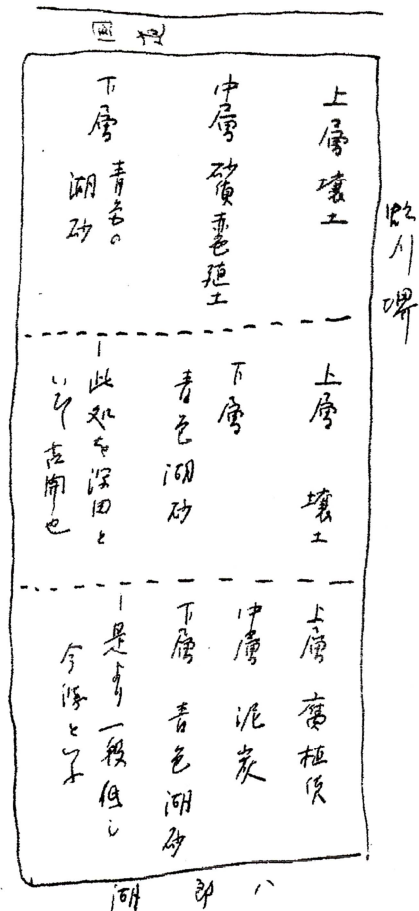
元木山の焼場ある長根にして、此崎の辺は元木村の旧屋布にして今の元木は移住したる地也。

天神社

もと菅原勘兵エの氏神にして北野（二田村端）天神場よりうつしたるよし。今の社の後に石の唐堂あり、これは元の御室のよし。今古祠のうちに五輪あり、如何なる人の墓印にや。

今潟の土質

下虻川境に今潟といふ処あり（下虻川にも此近を今潟といふ）。これは潟田を後開きたる時の名、則今潟田の下略なるべし。古潟田あるを以て知るべし。



汲田 袋

大久保の村の西部の字にあり。古る川より水を汲上るよりの名称なり。下汲田といふ処もあり。袋は川筋の曲りて袋のごときなりたるをいふ也。これにも袋、小袋の二ヶ処あり。

龍神

大久保村下町^{シン}の内にあり。神体は古川より背黒あみにかゝりて上りたるといふ。

菅原源十郎翁(俳名江春)の調られたる件々(全文) 大久保村肝煎順序

文禄年中佐藤五兵衛其父下総は、元雄鹿生岬の城主生駒秋田家の臣たるも、永禄中主家滅亡に際し金足村(元神瀬と書けり)字片田の里に遁れ其地に卒す。其子弥兵衛定宅大久保村(元マツミと号)に迁住す。其子五兵衛家久文禄年円福寺を建立す(円福寺は応永年中の開基なるも代々平僧地なり、文禄年中一寺一山となれり)。古主の遺牌(龍徳院殿祥山宗吉大禪定門神祇永禄七年五月廿八日卒)及び内仏華嚴釈迦如来(丈三寸)の尊像を笈の中に匿置せしを円福寺に安置す。委細は略す。遺牌は宝永年火災に失せたり。五兵衛の子孫世代五兵衛と号、正保年中は佐次右エ門と号す。苗字を三浦氏に更む。享保年中迄九代肝煎連綿たりと未詳。九兵衛、九十郎、又五兵衛、新左エ門、重三郎(吉兵衛先祖)、久之丞、嘉右エ門(宝暦年中肝煎、後代再肝煎)、源八(弘化二年斯連綿たるも

肝煎勤中格別の功蹟も聞得不申。

源八は昔より始めて支郷に於て肝煎を勤めたり。正保年以來一村の混雜たる野帳及諸帳簿古書明瞭絵図面等を別に製して、平常は昔より伝へたる大切の書物を秘藏して今に連綿たるは源八の功とも謂うべし。

外に別段の事を不聞。

大久保村支郷の始め

一新関村 は元奥北野（元天神場より桃木台の辺）に住せるを天正七年今の地に転住す。古名砂原村と号せしを新関に改む（慶長九年）。元祖は則菅原家の宗家甚兵エ也（此家小右エ門ともいふ又甚兵エともいふ）。

一元木村 昔は金足村（元神瀬と号）部内岩瀬村に属して福の又村と号せしを、延宝年中今の地に住す。元木村と改め本村に属す。

一野村 此地は元白洲野と唱へ広野なるも、弘化三年菅原孫兵エなるもの始めて引移、以来野村と称す。

因曰 弘化三四年より今の白洲野畑開墾せり。是は旧藩中関勘吉氏、其兄吉田嘉右エ門氏の扶

助を以て成就せり。

一大郷守 元金足村字下刈村に属せるも、元來住地は本村堺内たるを以て明治八年より大久保村に属す。

一大清水 元金足村字八丁目の内大清水なるも、明治九年より大清水の地に住するは金足に加はり、本村に住せるは本村に加ふ。

旧家

一新関村多左エ門 は与八郎の先祖也（代々多左エ門、与八郎、徳右エ門、半兵エ、又与八郎）。与八郎は代々の通り名也。

一金助の家 は百年以前断絶して當時は金右エ門の名唱を継ぐ。是は元多兵エの分地にして今助、金兵エ、金右エ門といふ。

一善吉（現今慶吉といふ）是皆新関六名屋敷の内也。

因云 正保年中の御調に本郷大久保村に屋布三十ヶ処、新関に六ヶ処（水呑とは小間居の屋布なりしとの事也）、戸数四十九戸也。

一新関六家 は甚兵エ、多左エ門、善吉、作兵エ、太兵エ、金助の六名也。

一大久保は略す。一二の旧家は

五兵衛、助左エ門、孫右エ門孫四郎事、惣左エ門、吉祥坊権四郎事、甚左エ門、新左エ門、長左エ門、正左エ門、与左エ門、源兵エ（源内事）、喜兵エ、久蔵等也。

桃樹の始

是は源八の叔父源四郎と申者本家奉公中、文化年中伊勢参宮に際し上方地方より桃の実を多く携帯して植立盛大にせり。尤新関は其以前にも宗家甚兵エの先祖奥北野（桃木台）に住せし頃も植立、後新関へ迁住に至りても植立たりと見得、元甚兵エ屋布の近処は竹植付候処の田地を竹原と唱ふ。されど新関北野畑へ植立て盛大せるは源四郎の功にして中興開山ならんか。

右適産調の料に菅原源十郎翁より調を申受たるもの也。

秋田風土記（郡邑記とも云）

大久保

元木 寛文三年卯より延宝六年まで福の又といふ。岡蔵人開之。寛文九年御竿入、延宝より名とす。

大郷守 延宝七年末下刈村肝煎新兵エといふ者乱橋の地を開き家居をなせり。

月山社、神明社、住吉社、山神社
地藏堂、大日社

円福寺 福寿山むかし天台宗本尊は雄鹿五郎の家来主人の持仏を安置す。

古書付の内に

一延宝二年寅八月晦日大窪村訴詔状の内二
塩屋出戸村といふことあり。

しめかけ森、大北野、二の崎、中北野
うとう坂、狐森潟ばた

大窪村庄屋佐治右エ門とあり。

一延宝四年十月廿八日の書付に

大籠谷地、八丁ノ目

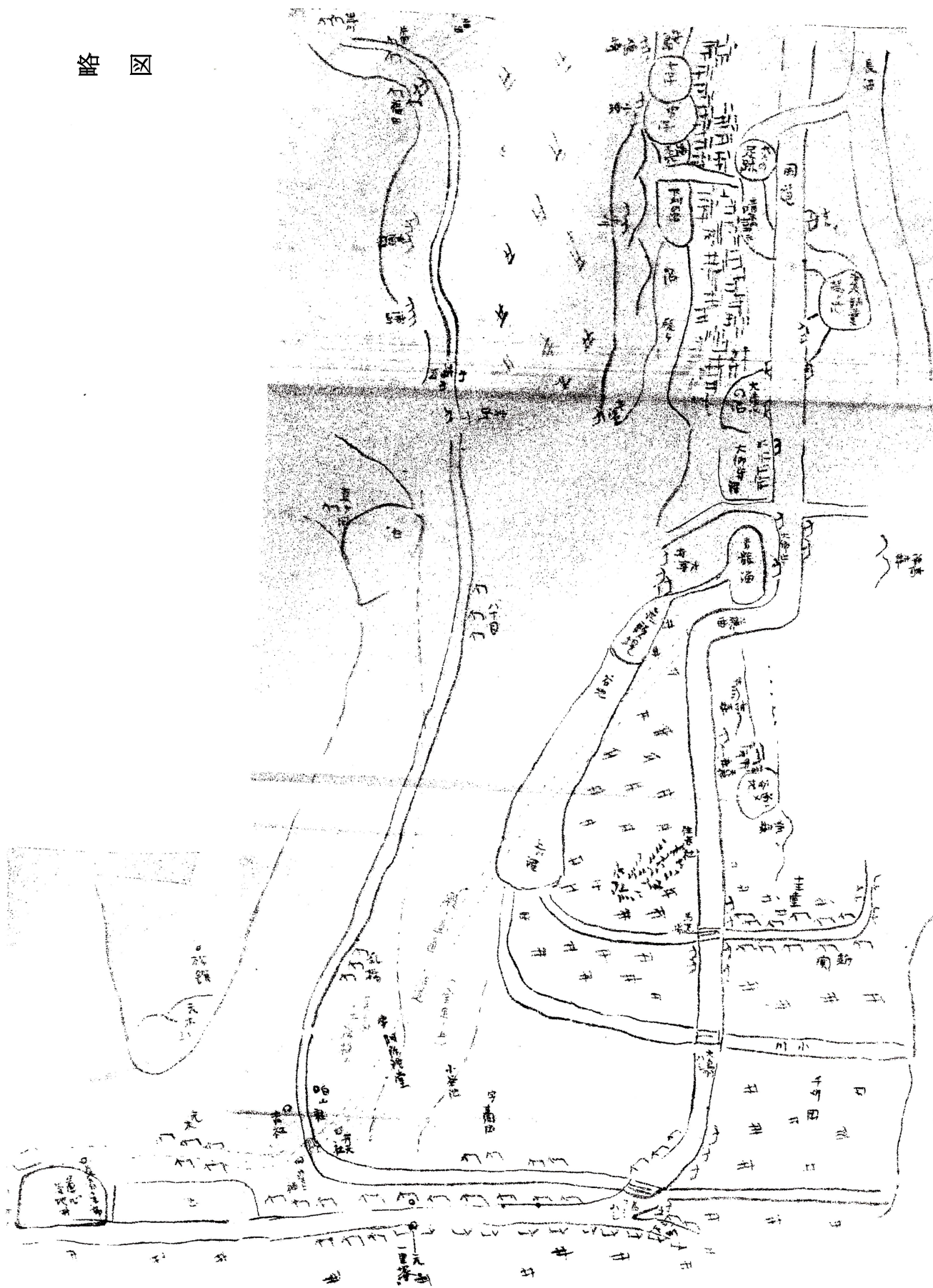
天王村、大窪村、蛇川村、其外北野の内に罷在候天神出戸村、塩屋村、大崎村、塩口村、右七ヶ村とあり。

或書に

八丁野目、古天神社

桃木台よりわに柳見通し境の事あり。

略 図



一金足の変動は黒川より発して八龍湖に出づ。

一金足の土は小谷地中程より阿弥陀堂中程まではき出したり。

一真ヶ田の土は阿弥陀堂より乱橋の地東の方にはき出したり。元木山根より上蛇川のはき出に会して元木の村下もにて地別れたり。合水する時の水勢にて腐植土を生ずる地出来たり。

一元木の壤土は淘汰したる洲崎にて出来たるべし。

一雄物川の本流は長沼にして、支流の

其一は笹島より小泉の女潟男潟、海老穴下刈の西部の堤（尼池等）数ヶ処を経て大清水の抜け堤に出て金足の広地に発せり。

其二是長沼より大人^{オオヒト}の足跡より第六勸業場池に

出て大清水の国道を横切、大清水、大郷守、青龍沼を経て七ツ森天神の後より留め谷地に出て八龍湖に出づ。

又其一方は青龍沼より無頭堤^{カシラナシ}に出て抜け堤等

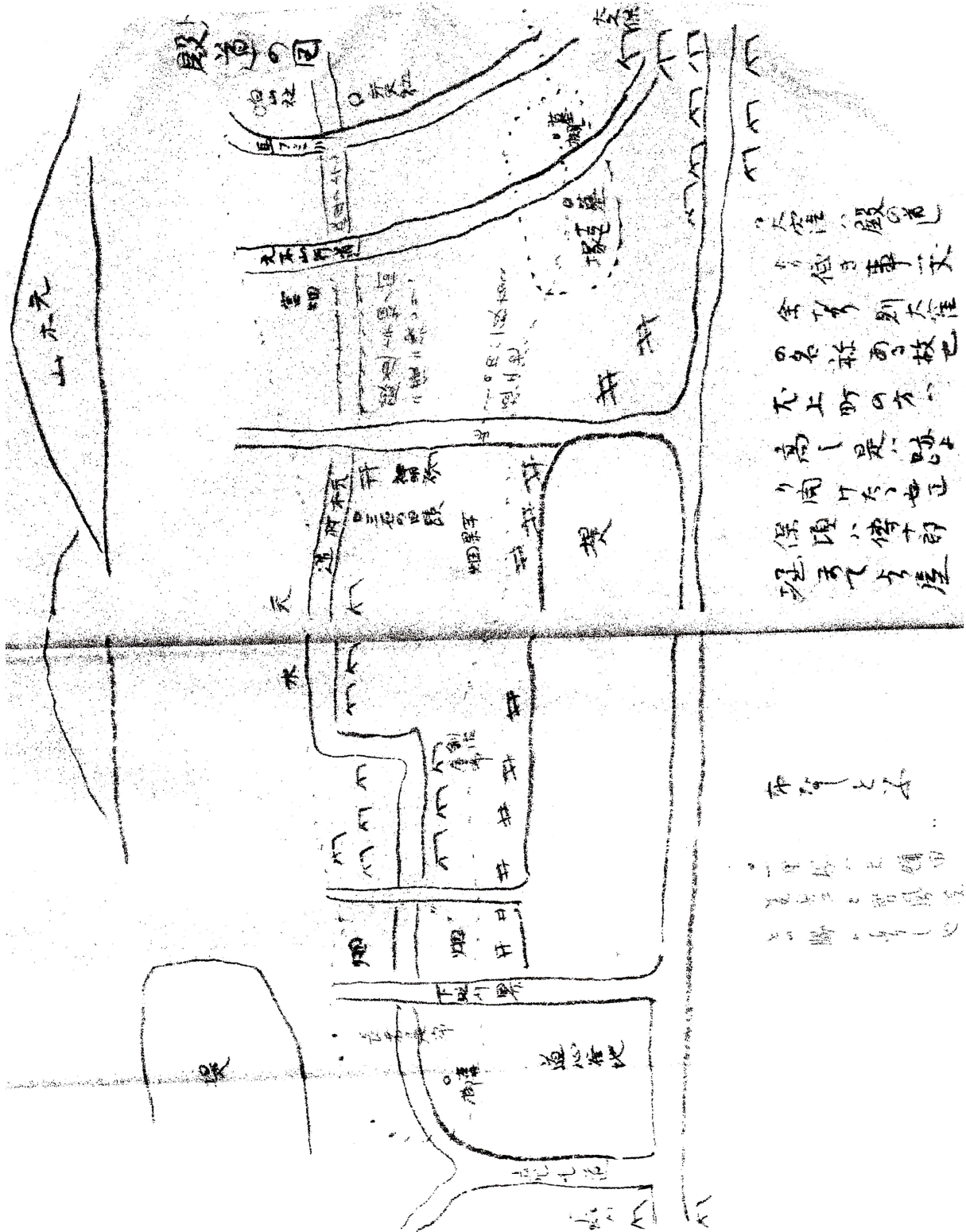
よりの水勢に合して押出したるを、住吉に一つの山ありてこれに遮られて水のだめるより天神前に窪地生ぜり。其沖の谷地はすべて此水勢

にて出たる也。最もふかきは上八沼にしてこれより小川新関等の諸流にわかる。小川は浅川にて小川の橋と新関の間にあり。新関は馬洗場より村を貫きて八龍湖に出づ。いづれも上八沼を水源としたる也。住吉近処の田地は砂土の客土多し。

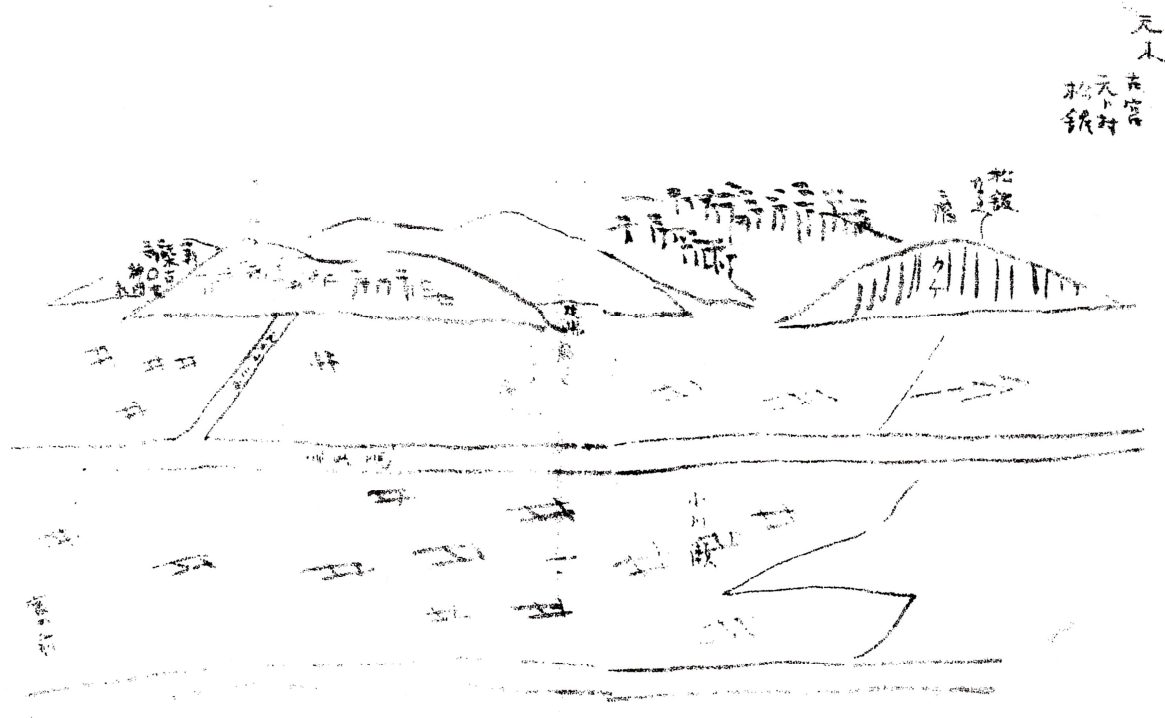
ならひ塚は奈良塚にして桜庭家の祖奈良より来り其塚也。桜庭の先代野帳に吉祥坊とあるこれ也。

殿道の図

大窪は殿の道より低き事一丈余なり則大窪の名称ある故也。尤上町の方
 方は高し是は跡より開けたる也。正保頃は伝十郎堀までより屋布なし
 といふ。一里塚は元鎌田善兵ヱと智鳳院との脇にありし也。



元木の図



野村

野村の小字に矢守、小藤崎、大藤崎、八ツノ家^{イツ}コ、中ノ瀬、ツクノイツコといふ処あり。ツクノイツコの事大崎を見合すべし。但チクか古寺のあとにや。

